

和歌における「女らしさ」

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本 那津子

本稿は筆者の「ことばとジェンダー」に関する研究の一環として、とくに和歌におけるジェンダーについて考察するものである。今回は古代から中世までの女性の和歌に関する言説をもとに、和歌における「女らしさ」について考える。ここで言う「女らしさ」を以下のように規定する。

- (1) その和歌に女性が詠んだ和歌に共通してみられる要素が見られること。
- (2) その歌の詠み手が女性であると判断させる要素があること。
- (3) 作歌の際に女性ならばかく詠むべきであるという規範意識が見られること。

和歌における「女らしさ」について述べたものとして紀貫之による「古今和歌集」仮名序の小野小町に関する記述がある。

小野小町は、いにしへの衣通姫のりう(流)なり。
あはれなるやうにてつよからず。
いはよき女のなやめるところあるに似たり。
つよからぬは、女の歌なればなるべし。

ここでは、小野小町の歌を「あはれなるやうにて、つよからず」と評しており、それを「女の歌なればなるべし。」と女性の歌に特有の性質として一般化している。「嫺々とした歌を始めとして、妖艶なもの、官能的なもの、繊細優美なものなど」(注 1)を女性の歌に特有な傾向としてとらえる傾向はこの頃すでに成立していた。

しかし、「あはれなるやうにてつよからず」というのはその歌のもつ雰囲気、あるいはその歌が相手に与える印象である。では、そうした印象はどうやって形づくられるものかを分析的に考える必要がある。

また、「男性が女性に擬して和歌を詠む」ということも古来よく行われている。そこには「このように詠めば女性の歌と認識される」という共通理解があらねばならない。そこで、本稿では以下の 3 つの切り口から和歌における「女らしさ」を考察していきたい。

- ① 女性の歌に多く使われる歌語
(あるいは女性が使うべきと考えられている歌語)
- ② 女性の歌に特徴的な発想の型
- ③ 発話行為としての歌い方

以下は論考の一部である。

歌語における性差

和歌の言葉に性差があることはすでに先学によって明らかにされている。その一例が『万葉集』における「君」の用法である。『万葉集』では、「君」は女性から男性に向けて使われ、その逆はなかったとされるのが通説である。このことの証左として佐伯梅友(注 2)は次の例を挙げる。

(例)

小治田之 年魚道之水乎 間無曾 人者檣云
時自久曾 人者飲云 檣人之 無間之如
飲人之 不時之如 吾妹子尔 吾戀良久波
已時毛無 (卷 13・3760)

反歌

思遣 為便乃田付毛 今者無 於君不相而
年之歴去者 (卷 13・3761)

今案、此反歌謂之「於君不相」者於理不合也、
宜宣言「於妹不相」也。

(読み下し)

小治田の 年魚道の水を 間なくそ
人は汲むといふ 時じくそ 人は飲むといふ
汲む人の 間なきがごとく 飲む人の 時じきがごと
我妹子に 我が恋ふらくは止む時もなし
(卷 13・3760)

反歌

思ひ遣る すべのたづきも 今はなし
君に逢はずて 年の経ぬれば(卷 13・3761)

今案ふるに、この反歌は『君に逢はず』と謂へれば
理に合はず。宜しく『妹に逢はず』と言ふべし。

この左注に記された「此反歌謂之『於君不相』者於理不合也」の部分は、卷 13・3260 が男の歌である(「吾妹子」という語からわかる)ので、当然その反歌も男の歌であるはずだ、という認識において「君」が使われていることから、「理に合はず」と判断した卷 13 の編集者の見解を表すものである。卷 13 編集当時、すくなくとも和歌においては「男が使うべき語」「女が使うべき語」の意識があったことがわかる。

折口信夫の「女歌」論

「女歌」という語は中古・中世の歌学書に散見され、もとは「歌の作者が女性であること」や「女房の歌」であることをしめすものであったが、これを学術用語として用いたのは折口信夫である。折口信夫は女歌の始原を歌垣における男女の掛け合いに求めた。祭事として行われた歌垣では男の歌い掛けに対し、女の返し歌は、はぐらかしたり、混ぜ返したり、揚げ足を取ったりするなど、男に反発し、否定的に対処するものが多い。この男女の対立は神祭りにおける来臨した神と土地の精霊との対立に由来すると言われている。つまり、神と精霊との問答は神に扮した男と、それを接待する巫女に扮した処女との間で行われ、やがて男女の掛け合いに展開したというものである(注 3)。こうした、否定的発想は王朝和歌においても受け継がれていく。男が相手の女に恋慕しかけるのに対して、それを受ける女が何らかの形で切り返して応じるという、男女の贈答歌の作法の源流はここにある。

(注 1) 「国文学 解釈と鑑賞」第 42 卷 8 号

「古代文学の常識 Q&A」

(注 2) 佐伯梅友『国語史 上古篇』

刀江書院 1936 年

(注 3) 「折口信夫全集」第一巻